



コロナ禍の一年を振り返って

浅原 一泰 中等部宗教主任

普段通りに卒業生を送り出せず、桜の花びらが舞い散る4月に入学式を行えない中で、命を脅かすウイルスと向き合って生きなければならぬ2020年度が始まりました。学校に登校できなかった6月初めまで、中等部でもオンラインによる配信授業が始められ、生徒たちは早寝早起きの生活を守る難しさを経験し、それは教員にとってもリモートでのホームルームや授業、動画作成のために熟慮を重ねる労苦の期間であったに違いありません。宿泊行事や部活の合宿や試合が中止になり、上級生たちは目標をどこに定めるべきか

に、また新入生たちは友達作りなどに苦心したと思います。この異常な事態において神は生徒たちをどう導こうとされるのか。聖書に答えを捜し求めても見つからない中で、ある時ふと、生徒たちを通して神は答えを示して下さいました。運動会や中等部祭を行うことができた二学期、彼らの表情は光り輝いていました。「学校に來れなくなったことで、当たり前前に過ぎて来た友達との毎日、部活の練習、授業が当たり前でないこととその有難さに気づかされた」とある生徒は証してくれました。「光は暗闇の中で輝いている。」コロナの暗闇が覆う世界の中であっても、昨日から今日へ、今日から明日へと前進しようとするこの生徒たちこそ、神は今も、いつまでも愛の光で輝かせて下さると信じる者です。



当たり前ではない日々

山元 克之 高等部宗教主任

当り前の毎日は、当たり前ではないことを誰もが感じた1年となりました。高等部では5月までのオンライン授業期間中は、聖句と200文字程度にまとめた先生方のメッセージを毎日配信しました。6月になり分散登校が再開され、礼拝も短い時間ではありましたが放送室より各HR教室に流されました。その後、例年通りの時間で礼拝をまもることができるようになり、感染対策を講じたうえで讃美歌も1節ではありましたが歌えるようになりました。夏休みがあけてから、一学年ずつPS講堂

に入り、他の学年はその音をHR教室に放送する形で礼拝をまもらしました。

COVID-19下で考えたことは、いつの時代もそうであったのですが、どの教職員も礼拝を中心と考え、その為に多くの協力をしていただき、礼拝の時間を持つことができていたということを、改めて強く感じました。

礼拝の時間を大切に考え、協力して下さる教職員の方々がいるからこそ、キリスト教教育が今の時代も変わらず行うことができます。高等部生もまた、その空気の中で聖書の御言葉に触れることができています。当り前の毎日は当たり前ではない。礼拝を捧げられることもまた、神の御業であると感じています。